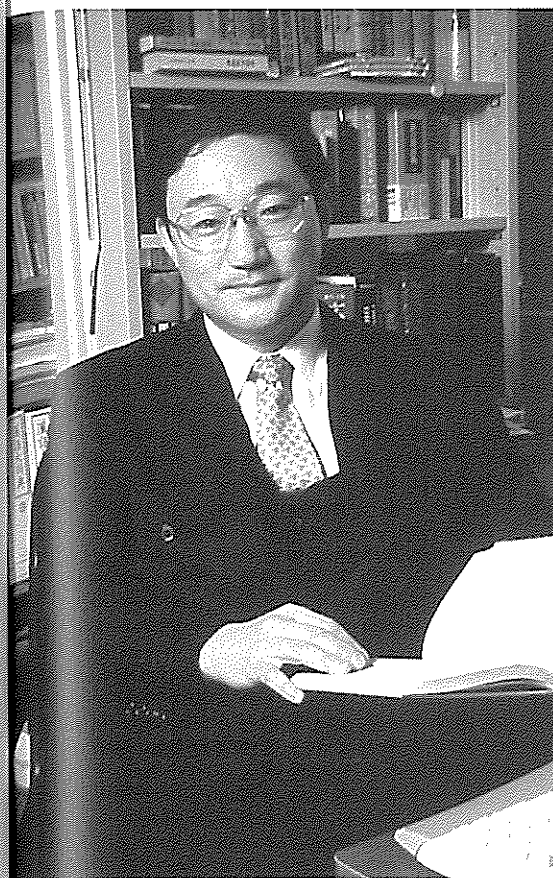


まるごと蘇州、 たつぷり江南

現代において「文人とはよりよく生きようと思う人」といういいのではないかと語る大木康氏。中国における文人の在り方、時代による変遷、そして江南文化のつきない魅力についてインタビューした。



大木 康（おおき やすし）
1959年横浜生まれ。専門は中国文学。現在、東京大学文学部助教授・同東洋文化研究所助教授。主な著書に『不平の中国文学史』（筑摩書房）、『中国近世小説への招待』（NHK出版）、『明末のはぐれ知識人』（講談社）。訳書には『山の郵便配達』（集英社）などがある。

中国知識人の理想型Ⅱ文人

——中国では、歴史のある段階で、高級官僚であり、かつ詩も書も画もすべてこなす、典型的な文人像というようなものができてきます。なぜこういうオールマイティーな人間像が求められたのかということ、それが中国の文化や制度、儒教とか科挙とかというものとどう関わってくるのか。その辺から先生のお考えを聞かせていただければと思います。

まず、宋代の蘇軾が文人の典型というか、始まりと見ていいのでしょうか？

大木 いちばん基本的なところから順に話してまいりますと、文人というのは中国の知識人、中国の言葉では「讀書人」と言いますが、要するに知識人の一つの形、在り方であることは確かですね。中国の讀書人、知識人というのは、例えば蘇軾、蘇東坡なんかの場合が典型的だろうとも思いますけど、いろいろな顔をもっているわけです。

つまりまず一つには公的領域といえますが、蘇軾は、公的な顔としては大臣クラスの官僚相当偉くなっているわけです。讀書人というもの、いわば政治的側面、公的な側面とそれを捉えて「士大夫」という言い方をします。ところがその同じ蘇軾という人が公的な場を離れてまったく自分一人の私的な場面で、詩を作ったり、書を書いたり、あるいは絵を描

いたりという、一種の個人的な楽しみ、そういう場所で捉えたと「文人」ということになるんですね。

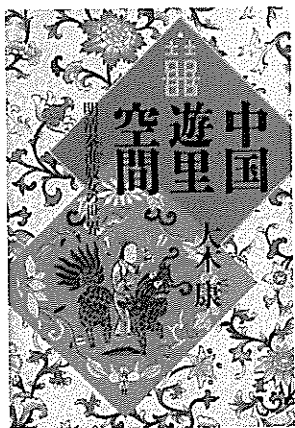
ですから、官僚としてもいいところまでいく、それから芸術的な部分を見ても超一流であるという、その点で蘇軾という人は、中国の讀書人の一つの理想型なんです。一応、すべての中国の知識人というのがやっぱりこの両方の面で、成功したいんだと思うんです。

ところがなかなかそういう風にはいかない。とくに「科挙」なんていう制度が複雑になってくると、その試験に通らないと官僚として出世できなくなりますから、そこでいわば私的な面だけの、つまり芸術活動だけで生きていく文人が出てくる、そういうような大きな流れなんだろうと思います。時代が下がって明代になってまいりますと、科挙合格を目指しながら、なかなか合格できない落第生が増えてくる。その中で才能のある人が、本当に芸術活動だけで生きていこうとする。

それからまた明代末期の江南地方という辺りですね、南京とか蘇州とか杭州とか。こういう辺りは経済的にたいへん豊かなところでお金持ちが多かったものですから、そういう芸術だけでやっていこうという人を養うだけの経済力があつたということになります。それで例えば蘇州で活躍した唐寅などのよう



蘇州風景 江南地方の中心都市、南京城内を流れる秦淮のほとりに、かつて繁栄を誇った色町があつた。革命を経て、色町そのものは失われたが、今また観光地として活気を取り戻しつつある。



大木氏の近著「中国遊里空間—明清秦淮妓女の世界」(青土社刊)



秦淮河に沿ったレストラン街 かつて色町のあつた場所は、現在レストランが立ち並び、賑わいを見せている。



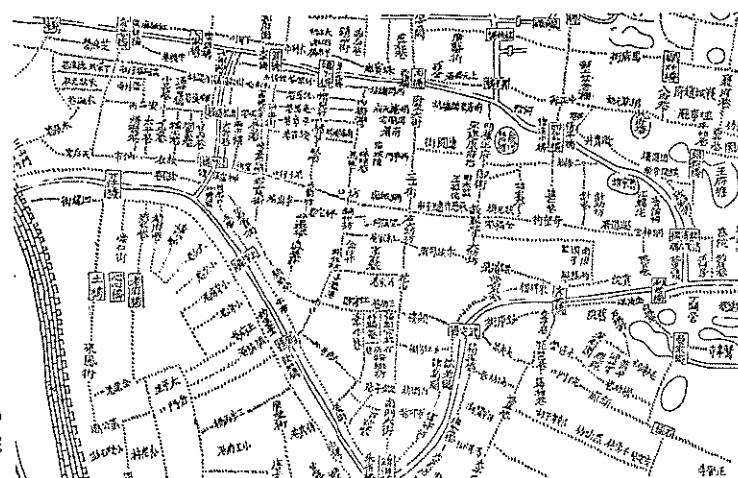
蘇州の裏町 蘇州の繁華街の中心である夫子廟から少し離れた路地裏には、昔ながらの人々の暮らしがある。表通りの雑踏がうそのような静たる街のたたずまい。



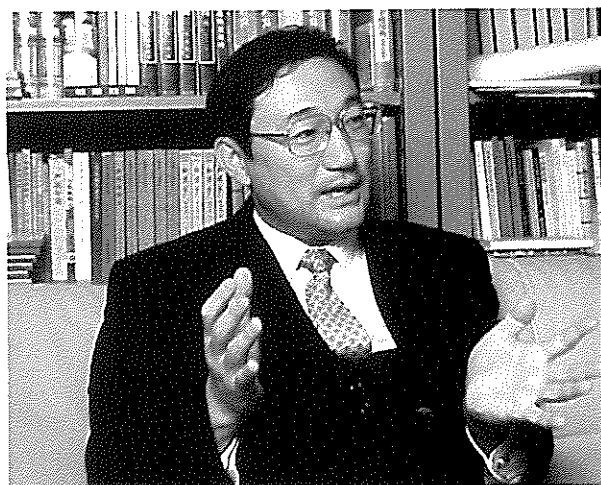
南京秦淮の夫子廟 南京秦淮の中心に位置するのが、孔子を祀った夫子廟である。その並びにかつての学校、そして科挙の試験場——貢院がある。夫子廟前の文徳橋を渡れば、そこが色町——旧院である。



秦淮河に臨む河房 南京の夏は暑い。水に臨んだ河房は涼風が吹きぬける一等地だ。



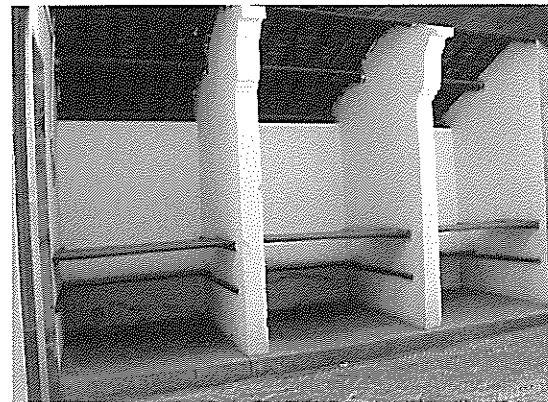
南京の古地図 今から百年以上前の清末ごろの南京秦淮の地図である。武定橋、文徳橋、貢院など、基本的には現在とかわっていない。



——科挙の試験科目も時代によって変わって、芸術的な世界、詩であるとか散文であるとか、書画の世界なんかに入っていくんじゃないかという気がします。

——明代当時の知識人というのはどんな暮らしをしていたんでしょうか。官僚にならないとまともな暮らしができないというようなこと自体がちょっと今のわれわれには想像できないところがありますけど。

大木 中国全体の人口から見れば、文字の読み書きの出来る知識人の数は少数だったろう



貢院の号舎 科挙の試験では、狭い号舎に三日三晩寝泊りして、答案を書き上げなければならなかった。一つの号舎はほぼ約1メートル。合格すれば一生の成功が保証された。



南京貢院明遠樓 秦淮の色町の川向こうには、科挙の試験場、貢院があった。3年に1度、江南各地の受験生がここに集まり、しごきを削った。

落第・芝居ぐるい・隠者 なんでもありの明代の文人

——高級官僚の登用試験である科挙それ自体が、文人的な素養を要求していたということがあったんでしょうか。先生の著作『不平の中国文学史』のなかにもかなり詳しく書かれていますけど。

大木 文章が書けるという意味での「文」の能力を持った人が社会のトップに立つ、これが中国の考え方です。

に、ほんとのいわゆる「文」のことだけをやる文人として、生活が成り立つようになったということなんだろうと思うんですね。

ただあくまで一つ注意しなきゃいけないことは、例えば唐寅は蘇州の文人の代表格で、實際絵を書いたり詩を作ったりして生活していたわけです。ところが彼も科挙は受けていません。彼なんかはかなりのいいところまでいったんですが、不正事件に引っかかって、上級の試験が受けられなくなっちゃったんですね。それで文人暮らしをするようになった。ですから初めから文人だけで行こうというような人っていうのはあんまりいないですね。みんな科挙の試験でうまくいかないとか、何らかの原因があつてせまい意味での文人になっていくということなんじゃないかと思うんです。

そういう「文」の考え方から、いかに「文」の能力がある人を選び出すかということ、科挙の制度が始まるわけですけども、この科挙の試験について一つ付け加えておきますと、この試験というのは、儒教の經典に関する試験であつたり、詩を作る試験であつたりするわけです。官僚の有資格者を選ぶための試験なんだけれども、経済実務とか法律実務とか、試験されるわけではないということなんです。

「官吏」という言葉がありますね。官僚のことを官吏という。しかし実は「官」と「吏」というのは全然違うもので、吏というのがつまり、裁判とか税金の計算とかの実務家なんです。それに対して官というのは、科挙の試験に合格した高官の方で、こっちはそういう「文」がないといけない。そういう仕掛けになっております。

科挙の試験科目も時代によって変わって、はくるわけですけども、明代とか清代の科挙では、いわゆる八股文はつこぶんと云って、答案用にちよつと特殊な文体、かなり型にはまった文体で文章を書くような試験になります。儒教の經典である「四書五経」の内容を、決められた形の文章で解説する試験です。まさに儒教の知識と教養自体が問われているということでしょう。ですからうまくいかなかった人とか、ドロップアウトした人とかは、そうい



花案の状元董年 秦淮の色町では、時に花案（美女コンテスト）が行われた。これは花案の記録の一つ『金陵百媚』で、トップの座を占めた董年の姿。「花案」のトップを「状元」というのは、科挙にならっている。



明末の名妓陳円円 明末の秦淮で活躍した八名の名妓「秦淮八艷」の一人、陳円円。彼女は名女優としての声望をほしいままにしていたが、その彼女の肖像に書物が描かれている事に注意したい。



明末の秦淮の様子『金陵図詠』。秦淮河をはさんで、右側の夫子廟と貢院、左側に色町である旧院。色町は今はないが、その配置は現在もあまり変わっていない。

と思います。しかし、それらの人々は、みんな生れた時から科挙の合格を目指して勉強し、みんな科挙を受けたんです。
ところが、だんだん試験を受けるやつが増えてきて、落ちるやつが増えてきたということはあるだろうと思いますね。ですからみんな寺子屋の教師や家庭教師みたいなことをしながら生活をしていたり、あるいはとくに明代の末期になりますと、いわゆる出版業ですね、本屋さんによる商業出版が非常にさかんに行われるようになって、科挙の試験に受からないような人でも、本屋さんの顧問みたい

な形になって本を出す。それで名前も売れば生活も成り立つという、そういう時代になるわけです。今までは科挙に通らないと名前とそれから利ですね、名と利を上げることができなかったのが、世の中が豊かになってくると、いろんなことで食えるようになるということじゃないかと思えますね。
馮夢龍なんていう人はそういう文人の中でもとくに本屋さんと深い関係を持っていた人です。彼は通俗小説、つまりそれまでだった知識人がまともに扱おうようなものじゃないと思われていた小説なんかを出すことで有名

になっていったわけです。
あともう一人、陳繼儒なんて人がいますけれど、この人なんか、科挙の試験を、わりと早い時期にあきらめまして、山へこもってしまっただけですね。それでいわば隠者になる。しかし彼は隠者の暮らしとか、あるいは詩文書画に関する知識といったようなものを売り物にして、生活をしていました。ほんとうだつたら山の中で暮らしている隠者が、出版で儲けてというのはおかしいはずなんですけれども、そういう面白い現象や人も出てくるんです。

——皇帝から招きがあったけれども、「隠者」の名前に傷がつくというんで行かなかつたという人ですね。

大木 ええ、そうです。ふつうだつたら皇帝から呼ばれたら、名譽になると思つてすぐいっちゃうんだらうと思うんですけども、陳繼儒の場合は、それが自分の商売の妨げになると考えたんでしょうね。皇帝の権威よりそつちの方が大事だつたということですよ。

——要するに官僚にならなくても暮らしがある程度成り立つようになった、いろんな生き方が出来るようになったということでしょうかね。ただ一つですね、やはり先生の著作『明末のはぐれ知識人——馮夢龍と蘇州文化』



の中にあつたんですけれども、馮夢龍、あとでなぜ先生がそれほど馮夢龍に惹かれたというところについて伺いたいと思いますが、馮夢龍との関係で一人、演劇の好きだつた祁豹佳という進士が出てきますよね。
その祁豹佳は馮夢龍の作品というのは二流か三流くらいにしか位置付けてなかつたところと書かれていますね。この祁豹佳は又人といつていいでしょうか。
大木 一流の文人といつていいと思います。実際詩文も作ってますし、自分のお屋敷にすばらしい庭園をつくつて、特に彼は芝居好きで有名な人です。
馮夢龍の方が祁豹佳よりずっと年上なんですけれども、馮夢龍の方は科挙の試験に通っていませんでしたので、いわゆる官界での地位・

社会的地位はもう天地雲泥の差なんです。祁豹佳はお芝居好きの大官ですね。馮夢龍はそういう偉い人の戯曲関係の一種の指南役といいますが、例えば芝居のテキストを集めるなんてことをやっていったんだと思います。これはおそらく陳繼儒の場合とかなり似ていて、それが収入ついでにいますか、多少の実入りにもなったんだと思うんです。明末の蘇州あたりでは、この文人的な趣味の教科書にあたる本がすごくたくさん出たんです。

お金持ちになって、一種のステイタスシンボルみたいなものとして文人に憧れる人、そういう文人暮らしをどうやったらいいのかわかって楽しもうという人が増えたという現象だと思いますね。

——先生が明清時代、とりわけ明末の馮夢龍に関心もったのはなぜでしょうか。

大木 明末という時代は、世の中のある程度の経済的な繁栄というのがあるって、芸術的な活動によって、生活が出来るようになるし、あるいは出版業を背景にいろいろ活動が出来た。それは、今の社会と割と近いような気がするんですよ。

それ以前の人々はやっぱ、必ずしも芸術活動そのものによって生活していたわけではないんですね。

ところがこの馮夢龍の場合は、どれだけ貫

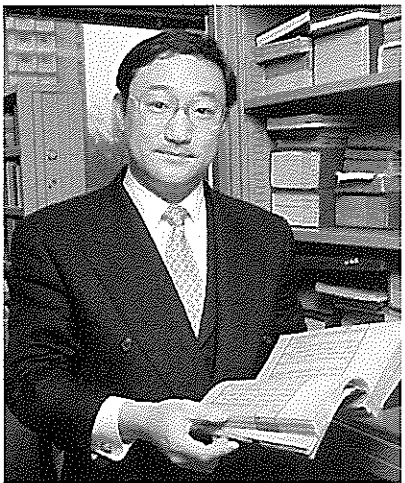
っていたか分かりませんが、とにかく本を出すというところで生活をしてたことは間違いないんです。その辺が今との繋がりのこととひとつの面白いテーマですね。

それから中国の文学作品を雅と俗に大きく分けた時、詩文の世界は雅で、小説なんでものは俗なもので、そういうのをそれまで全然馬鹿にして扱わなかった。それを馮夢龍は正面から扱ったということです。

通俗小説など、当時は文学とは思われなかったと思いますが、今の眼から見れば中国文学の世界が、こうわっと間口を大きく広げたのが明末の時代ですね。

明代の終わりの時期に『三國志』とか『水滸伝』とか、通俗小説の傑作がたくさん出てきます。ところがこれらの作品はみんな、作者がわからないわけです。そういう中で馮夢龍という人は、もちろん完全に分かるわけはないんですけど、小説作者として比較的資料が残っていて、いろんなことが分かるんです。そういう意味で目をつけ始めたというのが、馮夢龍を研究するきっかけだったんですけどね。

で、蘇州の人なものですからいろいろ蘇州のことを調べてみますと、そういう繁華な時代を背景にして、通俗文学だけじゃなく、陳繼儒みたいな人の活動とかいろんな現象が見えてきて、面白いなあということなんです。



「文人」とは「よりよく生きようと思う人」

——いま明末という時代が出版文化の隆盛などの点で、現代と似ているという話がありました。それでは、今日のわれわれは、そうした「文人」の世界からどのようなことを学ぶうるでしょうか。

大木 これはもう、ほんとに古い時代の話になりますけど、『論語』の雍也篇に、「子曰く『質、文に勝てば則ち野。文、質に勝てば則ち史。文質彬彬として然る後君子なり』」という言葉があります。「文」と「質」とがあって、「質」というのは、いわゆる実質ということ、人間が生きていくための最低条件と考えていいと思います。食べるものを作って、あるいは着るものを作って、そして



季香君の家 秦淮には、明末の名妓季香君が住んだと称する媚香楼が復元されている。写真は二階の回廊。一部分はレストランになっている。



季香君の寝室 媚香楼二階にある季香君の寝室。才子侯方域とのラブロマンスの舞台といえようか。



妓楼の様子 戯曲『桃花扇』の挿し絵に見える妓楼の内部。季香君の居室である。妓女の部屋とはいっても、書物や花、盆栽などが置かれており、文人の居室そのものの優雅な空間であった。

なんとか生きていける状態というのがこの「質」なんだろうと思います。

「文」というのは、ある意味でプラス・アルファの部分なんです。「文」という言葉自体はもともと飾りとか文様とか、文様の「文」ですよ。例えば、なんだっていいんですけど、湯呑茶碗に飾りがなくなったらお茶は飲めるわけです。実質というものが飾りよりも勝っているという状態が、これは「野」だということです。つまり粗野という時の「野」です。まあ、人間息をしているだけという状態。

それから「文」のほうが逆に勝り過ぎると今度は飾りばかりになって使えない。その「文」と「質」とが両方兼ね備わって初めて君子なんだということをいうんですけど、要するに「文」とは結局「飾り」っていうことですね。道具はなんだって飾りがなくなったら用は足りるわけです。しかし、それでよいかという問題ですね。やっぱり決してよいかというので、ある意味では人間らしさとか、人間としてよりよく暮らすとかということが「文」ということに結びついてきます。文化なんていうときの「文」っていうのは、そういうことじゃないんでしょうか。結局ただ息をしているというだけじゃなくて、よりよく、より幸福にというか、より満足に生きるためにはどうしたらいいか。そのところに、文人という問題も関わってくるわけですね。「文人」

